

# 大学等におけるキャリア教育・就職支援 のいまとこれから

\* 事実以外の箇所については所属組織の公的見解ではありません。



高等教育研究部  
生徒指導・進路指導研究センター(併)  
研究員 立石 慎治

## キャリア教育 = 社会的・職業的自立のための教育

“一人一人の**社会的・職業的自立**に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育”

– **様々な教育活動を通して実践**される

- 特定の活動や指導方法に限定されない

– **学校教育を構成していくための理念**と方向性を示すもの

- 一人一人の発達や社会人・職業人としての自立を促す視点
- 変化する社会と学校教育との関係性を特に意識

## \* \* 「キャリア」の意味 \* \*

人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね

このキャリアは、ある年齢に達すると自然に獲得されるものではなく、子ども・若者の発達の段階や発達課題の達成と深くかかわりながら段階を追って発達していくものである。また、その発達を促すには、外部からの組織的・体系的な働きかけが不可欠であり、学校教育では、社会人・職業人として自立していくために必要な基盤となる能力や態度を育成することを通じて、一人一人の発達を促していくことが必要である。

中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（平成23年1月）  
3

## 「移行」と「接続」

「移行」Transition の定義 \* たくさんあります。

「移行とは、一つの人生の段階や状態、状況から別の状態を目指す、身体状況、自己概念、アイデンティティ、役割や地位、関係性、環境、健康や能力、行動パターンなどの**変化のプロセス**である」

吉本知恵, 2005, 「“移行(transition)”の概念分析」『香川県立保健医療大学紀要』2

「接続」Articulation の定義 \* たくさんあります。

「子どもの学校生活における前進的成長をもたらすための**学校単位間及び単位内部の適切な調整と関連性を意味する概念**」

「異なる学校段階間の目的、内容、方法のすべてにおいて急激な変化や不当なギャップ、無駄や重複をなくし、生徒の移行を容易にスムーズにするための教育的作業」

清水一彦, 2016, 「教育における接続論と教育制度改革の原理」『教育学研究』83(4)

→

# 『学習指導要領』総則より

## 第4 児童（生徒）の発達の支援

### 1 児童（生徒）の発達を支える指導の充実

教育課程の編成及び実施に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

- (3) 児童（生徒）が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としてつつ各教科等の特質に応じて、**キャリア教育の充実を図ること**。（その中で生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、組織的かつ計画的な進路指導を行うこと。）

出典：『小学校学習指導要領』及び『中学校学習指導要領』（平成29年3月告示）  
5

## 第6章 特別活動（小学校）

### 第2 各活動・学校行事の目標及び内容

〔学級活動〕

#### 2 内容

- (3) 一人一人の**キャリア形成**と自己実現（新設）

ア 現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成

学級や学校での生活づくりに主体的に関わり、自己を生かそうとするとともに、希望や目標をもち、その実現に向けて日常生活をよりよくしようとする事。

イ 社会参画意識の醸成や働くことの意義の理解

清掃などの当番活動や係活動等の自己の役割を自覚して協働することの意義を理解し、社会の一員として役割を果たすために必要となることについて主体的に考えて行動すること。

ウ 主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用

学ぶことの意義や現在及び将来の学習と自己実現とのつながりを考えたり、自主的に学習する場としての学校図書館等を活用したりしながら、学習の見通しを立て、振り返ること。

出典：『小学校学習指導要領』（平成29年3月告示）

# 第5章 特別活動（中学校）

## 第2 各活動・学校行事の目標及び内容

### 〔学級活動〕

#### 2 内容

#### (3) 一人一人のキャリア形成と自己実現

##### ア 社会生活，職業生活との接続を踏まえた主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用

現在及び将来の学習と自己実現とのつながりを考えたり，自主的に学習する場としての学校図書館等を活用したりしながら，学ぶことと働くことの意義を意識して学習の見通しを立て，振り返ること。

##### イ 社会参画意識の醸成や勤労観・職業観の形成

社会の一員としての自覚や責任を持ち，社会生活を営む上で必要なマナーやルール，働くことや社会に貢献することについて考えて行動すること。

##### ウ 主体的な進路の選択と将来設計

目標をもって，生き方や進路に関する適切な情報を収集・整理し，自己の個性や興味・関心と照らして考えること。

出典：『中学校学習指導要領』（平成29年3月告示）

## 『社会に開かれた教育課程』

- 子供たちの学校生活の核となる教育課程
- 社会の中の学校であるためには，教育課程もまた社会とのつながりを大切にする必要

- ① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ，よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち，教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。
- ② これからの社会を創り出していく子供たちが，社会や世界に向き合い関わり合い，自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを，教育課程において明確化し育んでいくこと。
- ③ 教育課程の実施に当たって，地域の人的・物的資源を活用したり，放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし，学校教育を学校内に閉じずに，その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

中央教育審議会，2016，『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）』（平成28年12月21日）

# 「カリキュラム・マネジメント」の重要性

## 三つの側面

- 「社会に開かれた教育課程」の実現を通じて子供たちに必要な資質・能力を育成するという新しい学習指導要領等の理念を踏まえ、これからの「カリキュラム・マネジメント」については、以下の三つの側面から捉えられる。
- 1. 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- 2. 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。
- 3. 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）（平成27年8月26日） 9

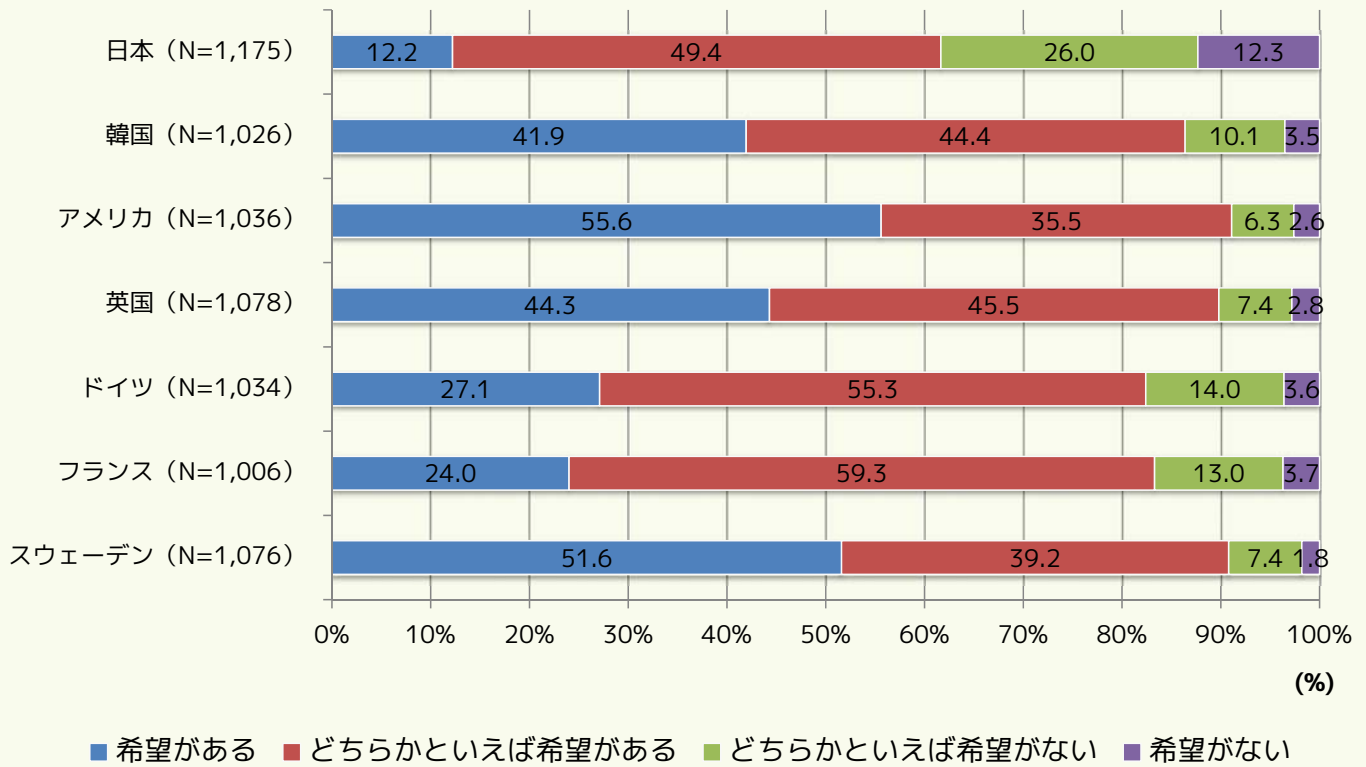
## 次期改訂に向けての課題

各教科等の在り方を考える際に、教育課程の要素全体が相互に有機的に関係し合って機能しているかどうか問われなければならない。改訂を重ねるごとに各教科等の独自性が増していく状況に対して、果たして教育課程が、学校全体の教育活動のバランスや調和といった観点から、その総体的な意義や存在感をどこまで示しているか、学校教育目標の達成にどのような役割を果たしているかを検討する必要がある。

教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）（平成27年8月26日） 10

# 青少年の将来展望は開けていない？

あなたは、自分の将来について明るい希望を持っていますか。

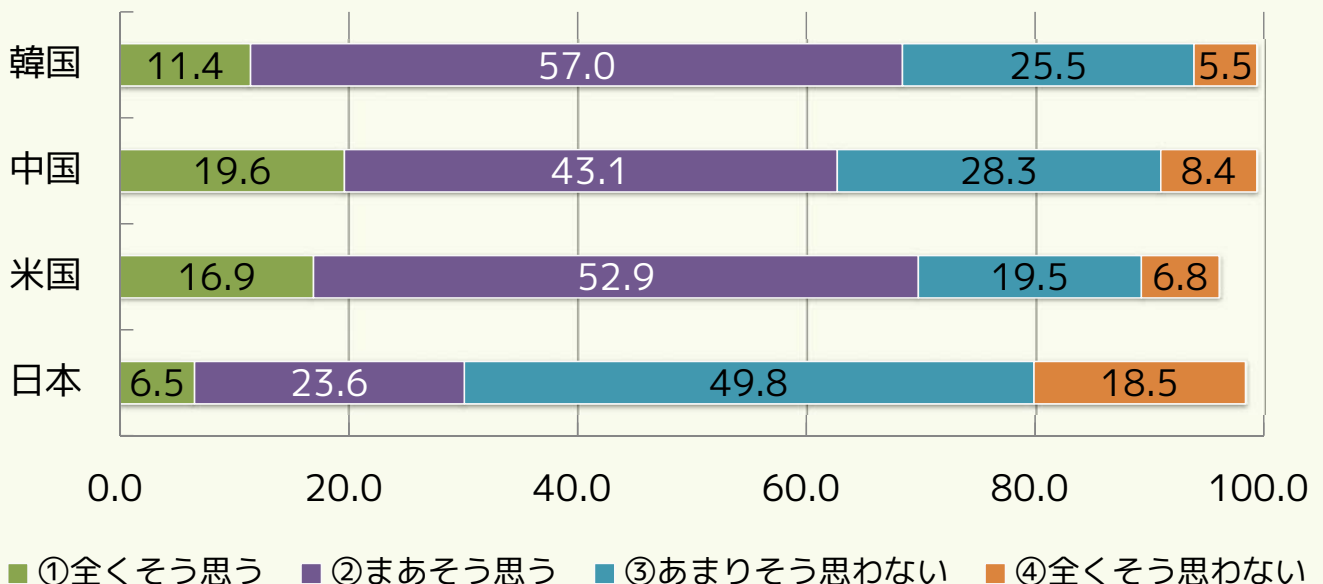


出典：内閣府（2014）『平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査』 11

# 中高生は社会を変えられると思えていない？

< 学校や社会への参加意欲 >

あなたは自分自身をどう思うか  
 (私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない)

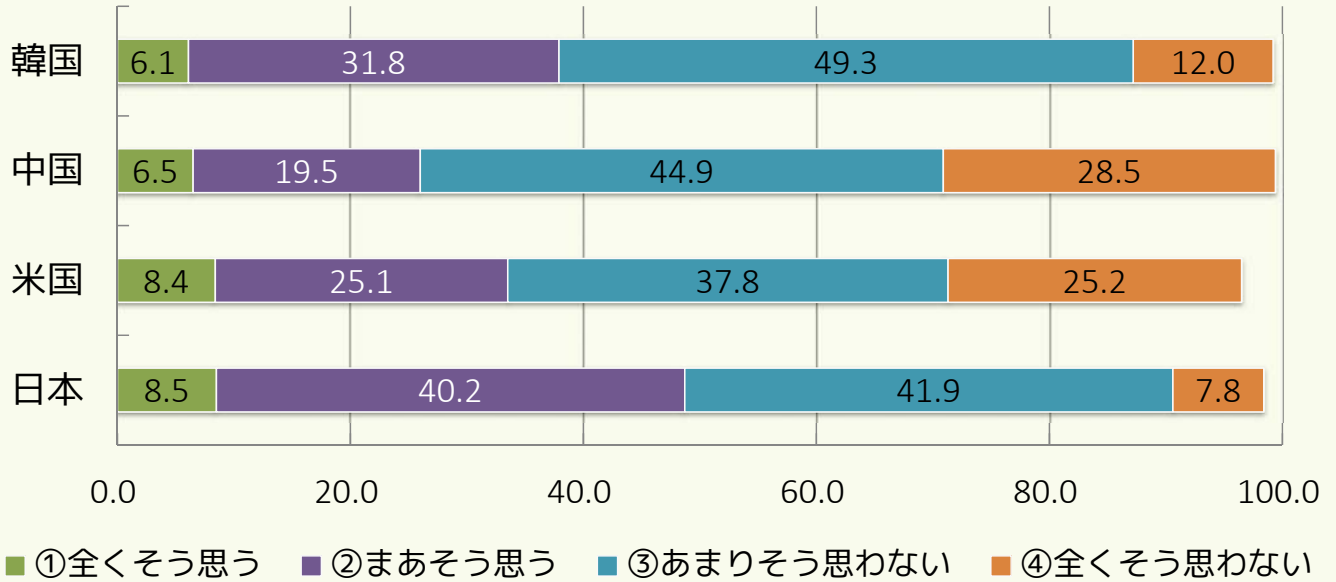


(出典) 「中学生・高校生の生活と意識 - 日本・アメリカ・中国・韓国の比較 - (2009年2月)」  
 財団法人 一ツ橋文芸教育振興協会, 財団法人 日本青少年研究所 12

# 中高生は社会に関与したくない？

<学校や社会への参加意欲>

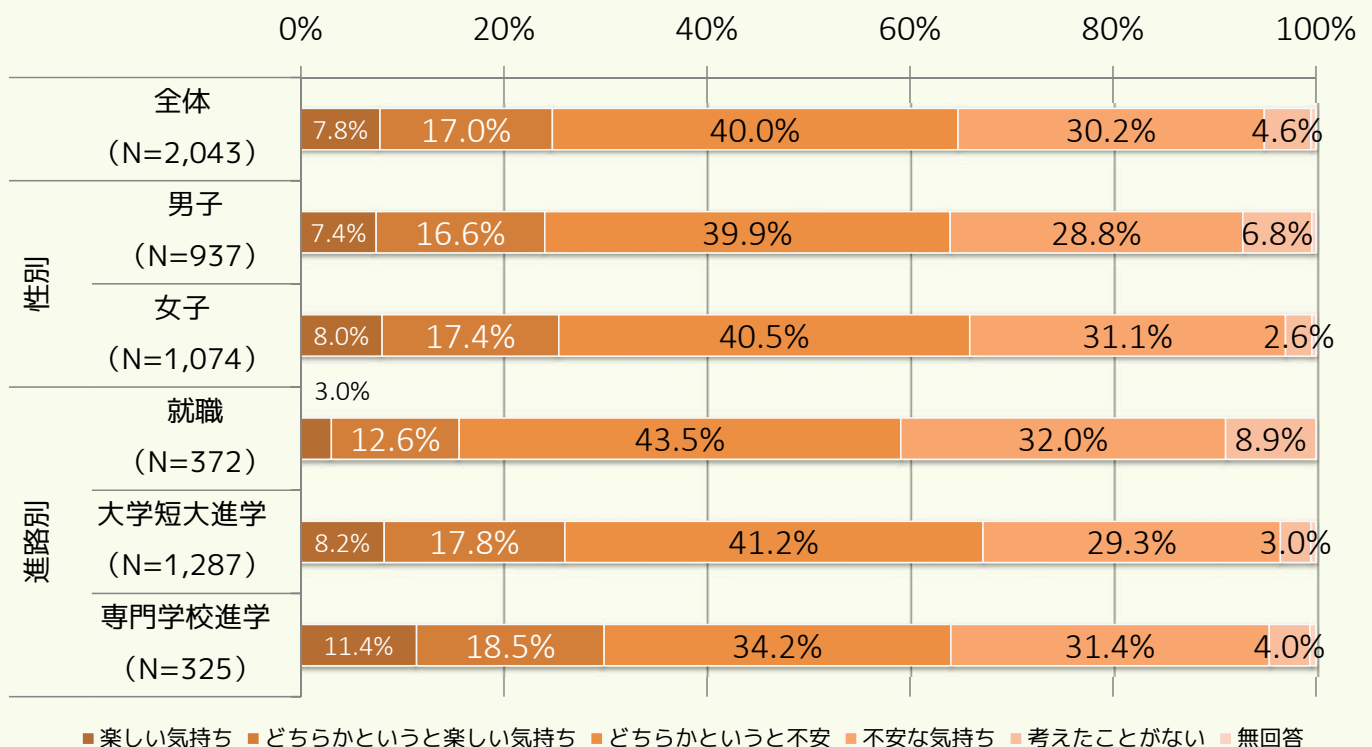
あなたは自分自身をどう思うか  
(社会のことはとても複雑で、私に関与したくない)



(出典) 「中学生・高校生の生活と意識 -日本・アメリカ・中国・韓国の比較- (2009年2月)」  
財団法人 一ツ橋文芸教育振興協会, 財団法人 日本青少年研究所 13

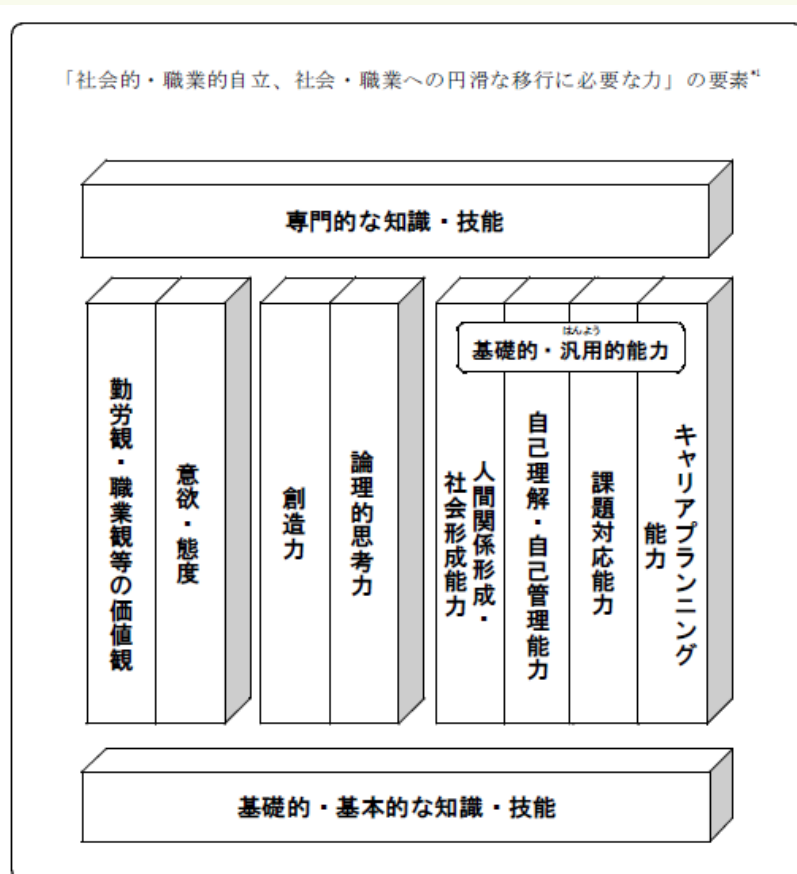
# 進路について考える時, 不安な気持ちに

進路について考える時, どんな気持ちになるか



資料出所: 全国高等学校PTA連合会・リクルートマーケティングパートナーズ (2014) 「第6回 高校生と保護者の進路に関する意識調査2013」

# 社会的・職業的自立に必要な力の要素



中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（平成23年1月）  
15

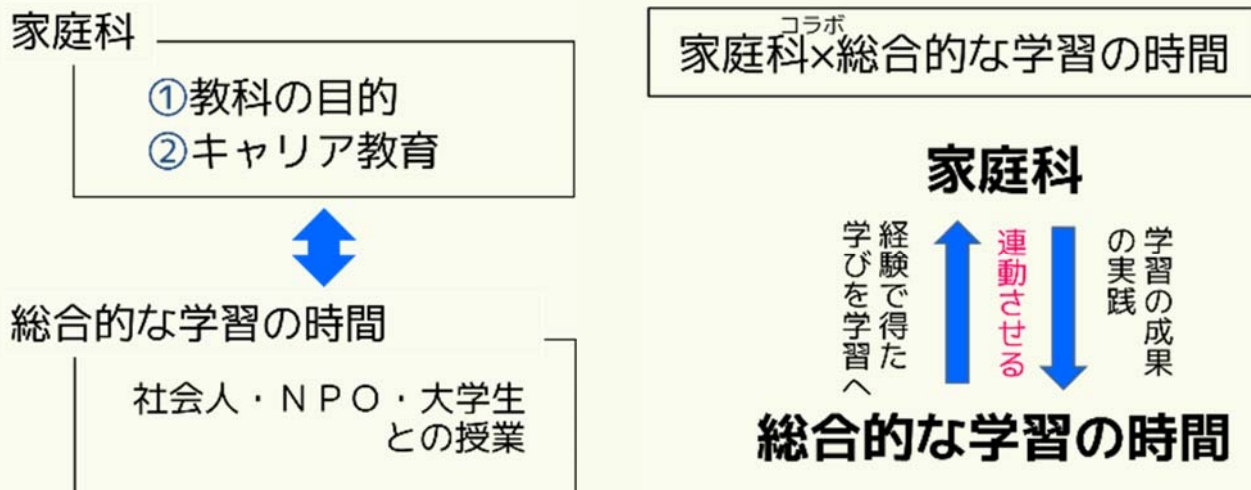
＊紹介事例用のメモ欄＊



# 指導手法から 都立高校の実践より

家庭科で、クラスメイトとやりとりする場面を毎時間に用意（＝アクティブラーニング的な活動場面も）

→ 毎時間のコミュニケーション体験で培った質問する技能を、総合的な学習の時間での社会人講話で活用



17

## 12年間をつなぐポートフォリオ

学校、家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行うこと。その際、**生徒が活動を記録し蓄積する教材等**を活用すること。

『中学校学習指導要領』第5章第2の〔学級活動〕の3の(2)

「生徒が活動を記録し蓄積する教材等を活用する」とは、こうした活動を行うに当たっては、振り返って気付いたことや考えたことなどを、生徒が記述して蓄積する、いわゆるポートフォリオ的な教材のようなものを利用することを示している。

○こうした教材を活用した活動の三つの意義

1. 中学校の教育活動全体で行うキャリア教育の要としての特別活動の意義が明確になる
2. **小学校から中学校、高等学校へと系統的なキャリア教育を進めることに資する**
3. 生徒にとっては自己理解を深めるためのもの、教師にとっては生徒理解を深めるためのもの

『中学校学習指導要領解説特別活動編』第3章 4(2)

18

# 体系的な教育へ

「我が国の高等教育の将来像(答申)」(平成17年1月28日)

「教育の充実の観点から、学部・大学院を通じて、学士・修士・博士・専門職学位といった学位を与える課程(プログラム)中心の考え方に再整理していく必要がある」(第3章1(1)(イ))

「各機関ごとのアドミッション・ポリシー(入学者選抜の改善)、カリキュラム・ポリシー(教育課程の改善)、ディプロマ・ポリシー(「出口管理」の強化)の明確化」(第5章2(1)2)

「学士課程教育の構築に向けて(答申)」(平成20年12月24日)

学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、入学者受入れの方針

「キャリア教育を、生涯を通じた持続的な就業力の育成を目指すものとして、教育課程の中に適切に位置付ける。豊かな人間形成と人生設計に資するものであり、単に卒業時点の就職を目指すものではないことに留意する。アウトソーシングに偏ることなく、教員が参画して学生のキャリア形成支援に当たる。」

19

# 体系的な教育へ

「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)」  
(平成24年8月28日)

6. 学士課程教育の質的転換への方策

・教育課程の体系化

大学、学部、学科の教育課程が全体としてどのような能力を育成し、どのような知識、技術、技能を修得させようとしているか、そのために個々の授業科目がどのように連携し関連し合うかが、あらかじめ明示されること。

……教員や学生が個々の授業科目の充実や学修にエネルギーを投入し、学修意欲を高めて主体的な学修を確立するために、各授業科目の内容・方法の改善、授業科目の整理・統合や相互連携、履修科目の登録の上限の適切な設定等に取り組むことが必要なのであって、ただ授業時数を増加させたり、教員・科目間の連携や調整なく事前の課題を過大に課したりすることは、学修意欲を低下させることはあっても、学士課程教育の質的転換に資することにはならない。

20

# アウトカム重視の大学教育改革

「すなわちアウトカムとは（中略）『一定の学習期間終了時に、学習者が知り、理解し、行い、実演できることを期待される内容を言明したもの』」

「今日では政府，納税者，学生・保護者，産業社会，雇用主，高校といった多様なステークホルダーに説明責任を果たすよう求められるようになっている」

1. 知識基盤社会—大学への期待の高まり
2. 緊縮財政—説明責任の強まり
3. グローバル化—大学教育改革の推進圧力

深堀聰子, 2015, 「序章 アウトカム重視の大学改革」

『アウトカムに基づく大学教育の質保証』東信堂

→ 初等中等教育においても，高等教育においても，「何ができるようになるのか」に焦点が絞られている

21

## キャリア教育と就職支援の間の中黒(・)が持つ重み

(社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制)

第四十二条の二 大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする。

『大学設置基準』

第三十五条の二 短期大学は、当該短期大学及び学科又は専攻課程の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、短期大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする。

『短期大学設置基準』

(参考：高等専門学校における社会的・職業的自立にかかる法令？)

第百十五条 高等専門学校は、深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成することを目的とする。

2 高等専門学校は、その目的を実現するための教育を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。

『学校教育法』

22

## キャリア教育と就職支援の間の中黒(・)が持つ重み

「要は、学内における連携体制を築き、大学が教育活動全体を通して、**キャリア教育を含むキャリア形成支援**を推進していくことであろう。教学においては、キャリア教育科目のみならず、導入教育やゼミでの活動を通して『生きる力』を身につけることが十分可能であり、このような働きかけを意識することも必要であると思われる」

川崎友嗣, 2005, 「大学におけるキャリア教育の展開—学ぶ力と生きる力の教育」『大学と学生』No.41

「次の課題が浮かび上がってきている。その第一は、厳かに定義されたキャリア教育は実は大学教育そのものだということである。(中略)第二に、キャリアガイダンスは特定の職業につくための就職指導ではないとされるのであるが、**現実の学生は、就職指導を必要としている**」

館昭, 2013, 『原理原則を踏まえた大学改革を』東信堂 23

## キャリア教育と就職支援の間の中黒(・)が持つ重み

「これまで複数の大学で学生の進路相談や就職相談の業務に携わってきた筆者の経験上、就職支援に分類される内容の相談対応・指導は、一度ノウハウを伝えて完結するものではない。特に進路選択に悩む学生や就職活動に苦戦する学生に対しては、個別継続的に、**学生の成長発達のプロセスに寄り添った、まさに「教育的な」かかわりが求められる**。学生の悩みに耳を傾けていると、学生が求めている支援と実際に大学で行われている支援との間には大きな隔たりがあるように感じられる。」

大森真穂, 2017, 「大学教育における就職支援の教育的課題とアプローチ」『教職研究』29

「大学の基礎教育は、就職活動のために行うものではない。しかし、大学は、生きる力としてのコミュニケーション能力を培う場所として機能することが求められつつある。ならば、**大学教育の延長線上を考慮して、学生生活で必要な能力と社会で活躍できるような能力とを関連づけて学生の表現能力を向上させる指導を考えるのがよい**」

中尾桂子・柴田実・東順子, 2013, 「就職支援を念頭においた表現能力の指導における達成目標をめぐって」『大妻女子大学紀要』44

# 高等教育におけるキャリア教育の推進方策

- キャリア教育の方針の明確化と、教育課程の内  
外を通じた体系的・総合的なキャリア教育の推  
進
- 体験的な学習活動の効果的な活用

中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」  
(平成23年1月)

→ ここでいう体験的な学習活動は、インターン  
シップやPBL、専門における実習が想定されて  
いる。

⇒ 自分のこととして引き受けられることに取り  
組むことで、各人の状況に応じて知識・技能を身  
に付けさせるとともに、能動的な学習を期待。

25

## 「量的拡大」から「質的深化」への移行期

「『必修科目として設置したキャリア科目の開設』『就  
職ガイダンス・セミナー等の実施』『卒業年次の学生全  
員に対する調査の実施』は、（中略）定着期にあること  
がわかった。それはマクロな視点からいえば、大学等  
におけるキャリア教育・就職支援の『量的拡大』から『質  
的深化』への移行期といえるだろう」

「近年の大学等におけるキャリア教育・就職支援の担当  
者には、支援内容が質的に変化し、広範化する中で、  
一定の専門性やマネジメント力も必要とされている」

望月由起, 2017, 「大学等におけるキャリア教育・就職支援の現状と課題」  
日本学生支援機構『大学教育の継続的変動と学生支援』

26

# 本WSで意識したい，私たちの認識の図式

「本論のタイトルを「キャリア教育におけるヒドゥン・カリキュラム」としたのは，現状の実践例や自大学での取り組みなどを見るにつけ，公式に表明されている教授内容や教育的呼びかけの背後に，語り部である教師やキャリア支援職員も十分意図していない，社会に対する固定的な現状認識や，あえて目をつぶっている現実というものを感じたからである。大学の教養教育として展開可能な範囲でキャリア教育を考えるなら，社会に対する批判的思考のプロセスをここで学生に示して，隠れているものを暴きたて，問題を構造化して考える機会をこそ与えるべきではないかと思ったからである。」

佐藤広志, 2013, 「キャリア教育のヒドゥン・カリキュラム」『教育総合研究叢書』6

27

## たとえば，勤労観・職業観

多くの人は，人生の中で職業人として長い時間を過ごすこととなる。このため，職業や働くことについてのどのような考えを持つのかや，どのような職業に就き，どのような職業生活を送るのかは，人がいかに生きるか，どのような人生を送るかということと深くかかわっている。

しかし，働くことや職業に対する理解の不足や安易な考え方等，若者の勤労観・職業観等の価値観が，自ら十分に形成されていないことが指摘されている。人生の中で「働くこと」にどれだけの重要性や意味を持たせるのかは，最終的には自分で決めることである。その決定の際に中心となる勤労観・職業観も，様々な学習や体験を通じて自らが考えていく中で形成・確立される。

# 最後にまとめ兼ねげかけ

これから先のキャリア教育・就職支援におけるゴール(のひとつ)

これまでキャリア教育・就職支援が培ってきた経験を基盤にしつつ、正課内外での働きかけが連動した、全学的キャリア形成支援の実現

初等中等教育で積み重ねてきたキャリア教育での学びを生かして発展的な内容を高等教育で

→

\* メモ欄 \*

	高等教育	初等中等教育
1997年	「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」(三省合意)	
1999年	「初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)」 * キャリア教育が初めて政策文書に記載される	
2003年	「若者自立・挑戦プラン」* 翌年までに「具体化」, 「推進」	
2004年	現代GP	
2005年	「将来像答申」 「社会人基礎力」中間とりまとめ * 最終報告書はなし	
2006年	実践的総合キャリア教育の推進(現代GP)	
2007年	同上	
2008年	第1期教育振興基本計画(～2012年度)	
	「学士課程答申」	
2010年	大学生の就業力育成支援事業	
2011年	「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」	
	設置基準改正(体制整備義務化)	現行学習指導要領「生きる力」
2012年	「質的転換答申」	
	産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業	

	高等教育	初等中等教育
2013年	第2期教育振興基本計画(～2017年度)	
2014年	「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」(三省合意)改訂	
2017年	「インターンシップの更なる充実に向けて 議論の取りまとめ」 大学入学共通テスト・プレテスト	
2018年	第3期教育振興基本計画(～2022年度)	
	大学入学共通テスト・プレテスト	新学習指導要領移行期間(小・中学校) * 特別活動先行実施可
2019年	専門職大学・専門職短期大学制度スタート 大学入学共通テスト・確認プレテスト	新学習指導要領移行期間(高等学校) 「高校生のための学びの基礎診断(仮称)」
2020年	「大学入学共通テスト(仮称)」	新学習指導要領全面実施(小学校)
2021年	「実施大綱」予告(新学習指導要領対応)	新学習指導要領全面実施(中学校)
2022年		新学習指導要領実施(高等学校)
2023年	第4期教育振興基本計画(～2027年度)??	
	新学習指導要領に対応した「実施大綱の策定好評」	
2024年	新学習指導要領に対応したテストの実施	